

# 夏季集中学習支援教室の効果測定

浅川 達人

## 1 目的

### (1) 明治学院大学「内なる国際化プロジェクト」の概要

2018年6月末現在の在留外国人数は、263万7,251人で、前年度末に比べ7万5,403人(2.9%)増加となり過去最高であった<sup>(1)</sup>。日本社会で暮らしている外国籍の人びとおよび外国につながる人びとと共生してゆくことが、今日の日本社会においては不可避の社会現象となっている。日本国内が国際化した今日、この「内なる国際化」に対応できる人材を育成することが肝要であり、それを目指したのが明治学院大学の「内なる国際化プロジェクト」(以下、「内なる国際化PJ」と記載する)である。明治学院大学では、社会学部と教養教育センターが共同して「内なる国際化PJ」を2015年より運営しており、活動を開始した2015年から今日まで、「研究活動」「啓発・教育活動」「教育プログラム整備」「支援実践活動」「広報活動」「自己評価」の6分野にわたる活動を行ってきた<sup>(2)</sup>。

教育プログラム整備の一環として、2017年度より多文化共生サポーター／ファシリテーター認証制度を開始した。内なる国際化PJの趣旨に合致する既存の科目をピックアップすることにより学びのガイドラインを整備し、それらの科目の中から12単位以上を修得した学生を、自己申告により「多文化共生サポーター」として認証する。それに加えて、「ボランティア実践指導」の単位を修得した場合、「多文化共生ファ

シリテーター」として認証するという制度も同時に開始した。春学期に「ボランティア実践指導」を受講した学生が、夏休み期間中に実施される集中学習支援教室にボランティアとして参加することによって支援活動を実施し、その振り返りを秋学期の「ボランティア実践指導」受講を通して行うのである。教室での学びに加えて、集中学習支援教室での支援活動において実践するという学習経験を修めた学生を「多文化共生ファシリテーター」として認証することとしたのである。

### (2) 財団・社会福祉法人・大学の三位一体で運営する集中学習支援教室

内なる国際化PJでは、2015年度より支援実践活動を行うための場の模索を開始した。その過程で、幸運な偶然から社会福祉法人「さぼうとにじゅういち」(以下、「さぼうと21」と記載する)の存在を知ることとなり、内なる国際化PJの事業展開に対する支援をいただく関係を構築することができた<sup>(3)</sup>。

さぼうと21の学習支援コーディネーターの矢崎理恵氏より、2016年4月上旬に、難民など外国にルーツをもつ子どもたちを対象に夏季休暇中の大学の教室を使って集中的に学習支援室を開催できないかという提案をいただいた。さらに幸運なことに、さぼうと21には、集中学習支援教室を行うために必要な資金が、一般財団法人柳井正財団から提供されることとなっ

た。

こうして、さぼうと21という社会福祉法人が行う小・中・高校生のための「集中学習支援教室」を、財団からの資金援助により、明治学院大学白金キャンパス内の教室を使って、明学生の実践的学びの場のひとつとして開催することができるようになった。2019年9月現在で、5回の開催を行なった<sup>(4)</sup>。

### (3) 効果測定

集中学習支援教室の運営主体であるさぼうと21も、資金提供を行なっている柳井正財団も、そして場所とボランティア学生を提供している明治学院大学としても、この集中学習支援教室が果たして子どもたちの学力向上に寄与しているのか、そして子どもたちの今後の社会的地位達成に対しても寄与し得るのかについて、Evidence Basedで検証することが望まれていた。そこで第3回集中学習支援教室(2017年7～8月開催)から集中学習支援教室の効果測定を開始することとなった。これまで第3回、第4回、第5回の集中学習支援教室において質問紙調査が行われたが、現段階で利用できるデータは第3回のものである。

本研究の目的は、第3回集中学習支援教室において実施された質問紙調査のデータを分析することにより、財団・NPO・大学の三位一体で取り組んだ集中学習支援教室が、難民小・中・高校生の学力および学習意欲向上に対してどの程度の寄与を成し得たかを分析することにある。

## 2 方法

第3回集中学習支援教室は、2018年7月27日、30日、8月2日、6日、13日から15日に開催された。参加した子どもは35名であった。教室に参加した全ての子どもたちに対して、教室の初

日と最終日<sup>(5)</sup>に調査票<sup>(6)</sup>を用いた調査を実施した。初日調査の回答者は35名、最終日調査の回答者は25名、初日と最終日の両調査をともに回答した子どもは24名であった。

データの入力は外部業者に委託した。調査票には整理番号が記入されており、整理番号と子どもたちを一致させる名簿は、さぼうと21のみが管理する体制をとり、入力を担当した外部業者および分析者が子どもたちを特定することができないようにした。この方法により、同じ子どもの教室の前後のデータを比較分析することが可能となる<sup>(7)</sup>。

初日に用いた調査票の質問項目は、以下の通りであった。

- 問1：学校に対する適応度
- 問2：成績に対する自己評価
- 問3：学習に対する意識
- 問4：友人数
- 問5：家庭学習時間
- 問6：進学意向
- 問7：将来に対する意見
- 問8：心理的健康状態(児童版抑うつ指標：DSRS-Cの9項目のうち5項目)
- 問9：勉強で頑張りたいこと(自由記述)
- 問10：属性項目

教室実施前後を比較できるように最終日に用いた調査票を設計した。質問項目は、以下の通りである。

- 問1：主観的健康
- 問2：学習に対する意識
- 問3：友人数
- 問4：家庭学習時間
- 問5：進学意向
- 問6：将来に対する意見

## 夏季集中学習支援教室の効果測定

問7：心理的健康状態(児童版抑うつ指標：

DSRS-Cの9項目のうち5項目)

問8：勉強で頑張りたいこと(自由記述)

問9：学習支援教室で楽しかったこと(自由記述)

問10：学習支援教室でいやだったこと(自由記述)

問11：進学意向および将来の仕事に対する考えが変わったか(自由記述)

なお、心理的健康状態については、家計経済研究所が2008年6月に行った「現代核家族調査」<sup>(8)</sup>において用いられた児童版抑うつ指標(DSRS-C：9項目)のうち5項目を採用し、それぞれについて3段階で尋ねた。このことにより、首都圏で暮らす子どもたちと学習支援教室に通った子どもたちの心理的健康状態を比較することができる。また、初日と最終日の結果を比較することにより、学習支援教室に通うことが子どもたちの心理的健康状態に与える影響を分析することとした。

### 3 結果

#### (1) 教室初日の調査結果

##### 【問1：学校に対する適応度】

本教室に参加した児童・生徒の88.2%<sup>(9)</sup>が授業を熱心に聞いていると回答し、88.2%が先生のいうことを聞き守ると回答していることから、本教室に参加した児童・生徒は学校文化に対して従順であり、馴染もうとしていることが示唆される。しかしながら、学校に遅刻することが多いと回答したものが17.7%おり、学校に行くのが嫌だと思ふものも23.5%いたことから、学校文化に馴染むことに困難を抱えている児童・生徒も2割程度存在することが示唆される。

##### 授業を熱心に聞いているか(Q1\_1)

出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
そう思う	13	37.14	13	38.24	38.24
まあそう思う	17	48.57	17	50.00	88.24
あまりそう思わない	3	8.57	3	8.82	97.06
そう思わない	1	2.86	1	2.94	100.00
欠損値	1	2.86			
合計	35	100	34	100	

##### 先生の言うことを聞き守るか(Q1\_2)

出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
そう思う	19	54.29	19	55.88	55.88
まあそう思う	11	31.43	11	32.35	88.24
あまりそう思わない	4	11.43	4	11.76	100.00
欠損値	1	2.86			
合計	35	100	34	100	

##### 学校に遅刻することが多いか(Q1\_3)

出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
まあそう思う	6	17.14	6	17.65	17.65
あまりそう思わない	10	28.57	10	29.41	47.06
そう思わない	18	51.43	18	52.94	100.00
欠損値	1	2.86			
合計	35	100	34	100	

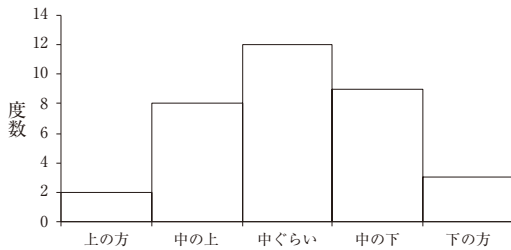
##### 学校に行くのが嫌だと思ふか(Q1\_4)

出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
そう思う	3	8.57	3	8.82	8.82
まあそう思う	5	14.29	5	14.71	23.53
あまりそう思わない	15	42.86	15	44.12	67.65
そう思わない	11	31.43	11	32.35	100.00
欠損値	1	2.86			
合計	35	100	34	100	

##### 【問2：成績に対する自己評価】

学校での成績に対する自己評価は、正規分布に近い分布を示しており、中ぐらいが35.3%と最も多かった。上の方および中の上と回答したものは29.3%であったのに対して、中の下および下の方と回答したものは35.2%とやや高い比率を示していた。クラスの中で、真ん中より下の方の成績と評価している児童・

生徒が1/3以上存在しているので、学習に困難を感じている児童・生徒が少なくないことがわかる。



**【問3：学習に対する意識】**

「寝る時間を減らしてまで良い成績をとらなくてもよい」という意見に対して肯定的なものは41.2%であり、「勉強が嫌だと感じることはあるか」という問いに対して肯定的なものは54.6%であった。学習に対する意識はほぼ二分されているが、これが何によるものかは(性別によるのか、小学生・中学生・高校生という学校種別によるのか)は、さらなる分析を経ないと一概には言えない。

寝る時間を減らしてまで良い成績をとらなくてもよい(Q3\_1)

出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
そう思う	5	14.29	5	14.71	14.71
まあそう思う	9	25.71	9	26.47	41.18
あまりそう思わない	15	42.86	15	44.12	85.29
そう思わない	5	14.29	5	14.71	100.00
欠損値	1	2.86			
合計	35	100	34	100	

勉強が嫌だと感じる (Q3\_2)

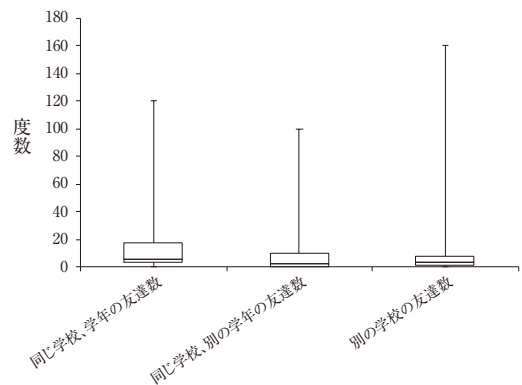
出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
そう思う	6	17.14	6	18.18	18.18
まあそう思う	12	34.29	12	36.36	54.55
あまりそう思わない	12	34.29	12	36.36	90.91
そう思わない	3	8.57	3	9.09	100.00
欠損値	2	5.71			
合計	35	100	33	100	

**【問4：友人数】**

調査では「よく一緒に遊んだり、おしゃべりをしたりする友だちは何人くらいいますか」と尋ねている。「同じ学校の同じ学年」「同じ学校の別の学年」「別の学校に通っている人」と3種類のネットワークについて尋ねた結果は、下のグラフの通りであった。グラフは箱ひげ図であり、箱の中心線が中央値を示しており、箱の幅が回答者の半数の回答を示し、ヒゲは最小値と最大値を示している。

「同じ学校の同じ学年」については、最小値が0人、最大値が120人であった。中央値は6名。回答者の半数は3.5人から18人を挙げていた。「同じ学校の別の学年」については、最小値が0人、最大値が100人であった。中央値は3名。回答者の半数は1人から10人を挙げていた。「別の学校に通っている人」については、最小値が0人、最大値が160人であった。中央値は3.5名。回答者の半数は1.3人から7.8人を挙げていた。

このように分布が偏っているので、中央値と回答者の半数の傾向を読み解くと、同じ学校の同じ学年の友人が多く、6名前後の友人がいることがわかる。

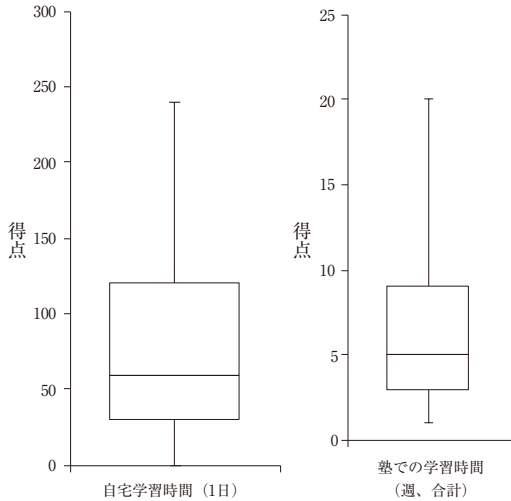


**【問5：家庭学習時間】**

自宅での1日の学習時間を尋ねたところ、中央値は60分、回答者の50%は30分から120分と

夏季集中学習支援教室の効果測定

回答していた。塾に通っていると答えた児童・生徒は9名であり、週合計の学習時間は中央値が5時間、回答者の50%は3時間から9時間と回答していた。



【問6：進学意向】

進学希望を尋ねたところ、大学までと回答したものが最も多かった(55.9%)。ただし、高校までと回答したものとまだわからないと回答したものがそれぞれ10%程度存在しており、進学希望を明瞭に固めていない児童・生徒も少ないことがわかる。

進学希望 (Q6)

出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
高校まで	4	11.43	4	11.76	11.76
専門学校まで	2	5.71	2	5.88	17.65
高専・短大まで	1	2.86	1	2.94	20.59
大学まで	19	54.29	19	55.88	76.47
大学院まで	4	11.43	4	11.76	88.24
まだわからない	4	11.43	4	11.76	100.00
欠損値	1	2.86			
合計	35	100	34	100	

【問7：将来に対する意見】

その一方で、「大学を出ないとよい仕事に就けない」という意見を肯定するものは73.5%と

多い。問6で見た通り、大学までの進学を希望しているのは55.9%であったことを考え合わせると、大学進学すべきとは考えるものの、難しいかもしれないと考えている児童・生徒が少なからず存在することが示唆される。「がんばって働かなくても暮らしていける」と楽観的に考えているものは14.7%と少数派であり、「希望する学校や会社に入れないかもしれない。不安だ」と回答したものは64.7%を占めており、将来に対して不安を感じている児童・生徒が少なくないことがわかる。

大学を出ないとよい仕事につけない (Q7\_1)

出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
そう思う	11	31.43	11	32.35	32.35
まあそう思う	14	40.00	14	41.18	73.53
あまりそう思わない	6	17.14	6	17.65	91.18
そう思わない	3	8.57	3	8.82	100.00
欠損値	1	2.86			
合計	35	100	34	100	

がんばって働かなくても暮らしていける (Q7\_2)

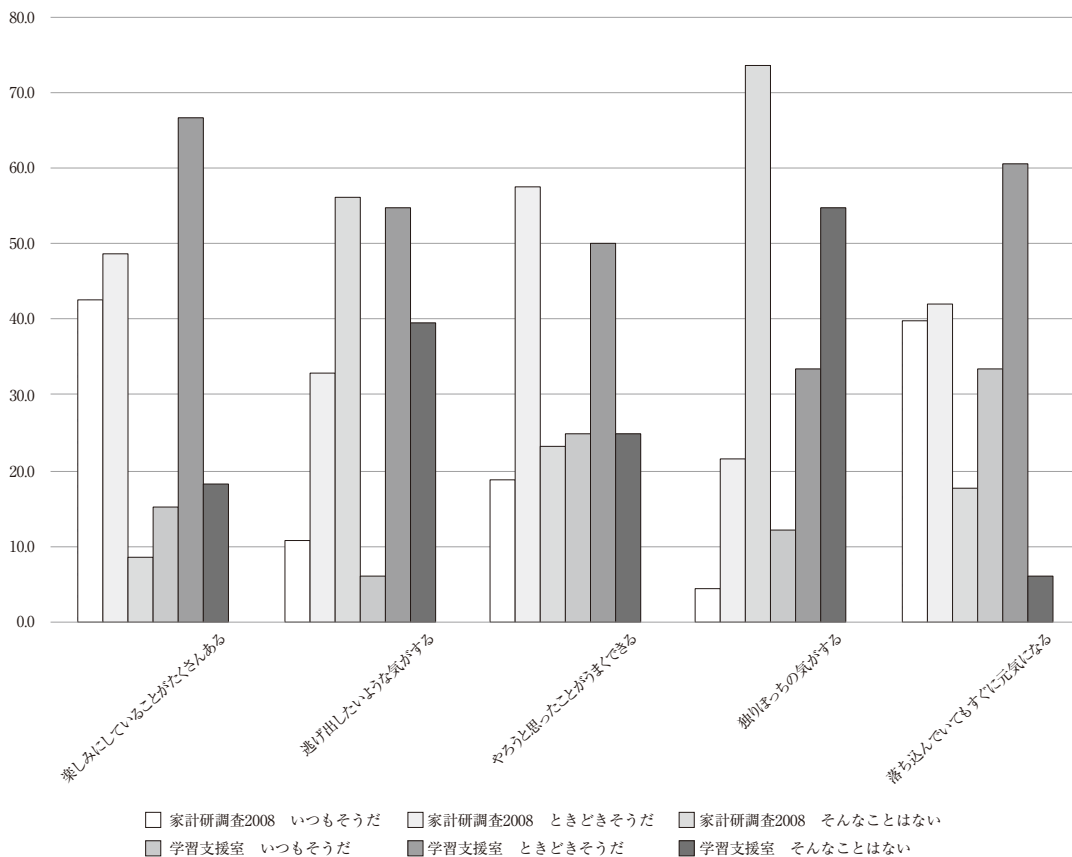
出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
そう思う	1	2.86	1	2.94	2.94
まあそう思う	4	11.43	4	11.76	14.71
あまりそう思わない	17	48.57	17	50.00	64.71
そう思わない	12	34.29	12	35.29	100.00
欠損値	1	2.86			
合計	35	100	34	100	

希望する学校や会社に入れないかも、不安 (Q7\_3)

出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
そう思う	8	22.86	8	23.53	23.53
まあそう思う	14	40.00	14	41.18	64.71
あまりそう思わない	8	22.86	8	23.53	88.24
そう思わない	4	11.43	4	11.76	100.00
欠損値	1	2.86			
合計	35	100	34	100	

【問8：心理的健康状態】

心理的健康状態については、家計経済研究所が2008年6月に行った「現代核家族調査」にお



いて用いられた児童版抑うつ指標(DSRSC) 9項目のうち5項目を採用し、それぞれについて3段階で尋ねた。家計研調査と学習支援室調査の結果を、棒グラフに示した。

6本の棒グラフのうち、左から3本が家計研調査の結果を、残りの3本が学習支援室調査の結果を示している。この一週間の気持ちについて「楽しみにしていることがたくさんある」について、「いつもそうだ」と回答した子どもの割合は、家計研調査では42.5%であったのに対して、学習支援室調査では15.2%と28ポイントも低い値を示していた。「逃げ出したいような気がする」について、「そんなことはない」と回答した子どもの割合は、家計研調査では56.0%であったのに対して、学習支援室調査では39.4%と17ポイント低い値をしめしていた。

「やろうと思ったことがうまくできる」については、両調査の結果に大きな差はなかった。「独りぼっちの気がする」については、「そんなことはない」と回答した子どもの割合は、家計研調査では73.4%であったのに対して、学習支援室調査では54.6%と18ポイント低い値をしめしていた。「落ち込んでいてもすぐに元気になる」については、「そんなことはない」と回答した子どもの割合は、家計研調査では17.6%であったのに対して、学習支援室調査では6.1%と12ポイント低い値をしめしていた。

このように、首都圏で暮らしている子どもたちよりも、学習支援室に参加した子どもたちの方が、抑うつ傾向が高く、心理的健康状態が悪いことがわかった。

夏季集中学習支援教室の効果測定

【問9：勉強で頑張りたいこと(自由記述)】

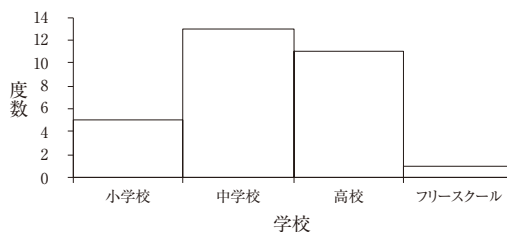
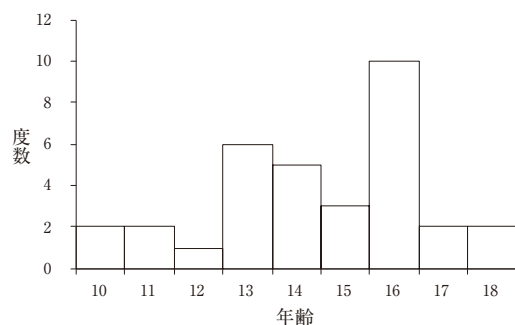
「勉強で頑張りたいこと」を自由記述にて尋ねた。無回答を除く全ての記述(29ケース)を対象としてアフターコーディングを試みた<sup>(10)</sup>。「理科」「社会」「国語」「数学」「英語」のように具体的に教科名を挙げた記述には「教科」というコードを付与し、「不登校でおくれた分をとりもどしたい」「自分が入りたい大学に入るために一生懸命に勉強したい」「とにかく社会人として、最低限のことはできるようにしたい」といった記述に対しては、「目標」というコードを付与した。1名分の記述の中に「教科」と「目標」の両方のコードが振られることもあるので、コードは複数回答となる。

コードについて集計した結果、「教科」は23ケース、「目標」は11ケースであった。すなわち、「理科」「社会」「国語」「数学」「英語」のように、勉強で頑張りたい教科を答えるケースがほとんどであったことがわかる。初日の段階で、自らの学習について目標設定がなされていたのは約1/3程度であった。

【問10：属性項目】

性別(Q10\_1)

出現値	度数	確率 (%)	有効 度数	有効 確率	累積 確率
男	12	34.29	12	36.36	36.36
女	21	60.00	21	63.64	100.00
欠損値	2	5.71			
合計	35	100	33	100	



部活動参加(Q10\_4)

出現値	度数	確率 (%)	有効 度数	有効 確率	累積 確率
入っていない	12	34.29	12	36.36	36.36
入っている	21	60.00	21	63.64	100.00
欠損値	2	5.71			
合計	35	100	33	100	

宗教(Q10\_5)

出現値	度数	確率 (%)	有効 度数	有効 確率	累積 確率
キリスト教	17	48.57	17	51.52	51.52
イスラム教	7	20.00	7	21.21	72.73
仏教	4	11.43	4	12.12	84.85
それ以外の宗教	1	2.86	1	3.03	87.88
信仰している宗教はない	3	8.57	3	9.09	96.97
回答しません	1	2.86	1	3.03	100.00
欠損値	2	5.71			
合計	35	100	33	100	

親との会話で用いる言語：本人(Q10\_7YOU)

出現値	度数	確率 (%)	有効 度数	有効 確率	累積 確率
日本語	10	28.57	10	35.71	35.71
日本語以外	10	28.57	10	35.71	71.43
両方	8	22.86	8	28.57	100.00
欠損値	7	20.00			
合計	35	100	28	100	

親との会話で用いる言語：親(Q10\_7PAMA)

出現値	度数	確率 (%)	有効 度数	有効 確率	累積 確率
日本語	1	2.86	1	3.03	3.03
日本語以外	17	48.57	17	51.52	54.55
両方	15	42.86	15	45.45	100.00
欠損値	2	5.71			
合計	35	100	33	100	

きょうだいの会話に用いる言語：本人(Q10\_8YOU)

出現値	度数	確率 (%)	有効 度数	有効 確率	累積 確率
日本語	12	34.29	12	44.44	44.44
日本語以外	8	22.86	8	29.63	74.07
両方	7	20.00	7	25.93	100.00
欠損値	8	22.86			
合計	35	100	27	100	

会話に用いる言語について尋ねた。親と会話する場合の本人の言語については、日本語、日本語以外、両方がそれぞれ約1/3ずつであった。親との会話における親の言語については、日本語以外と両方が97%を占めていた。きょうだいとの会話については、日本語が44.4%と高い値を示していた。児童・生徒は、学校では日本語を用い、自宅においてはきょうだいは日本語で話すものの、親とは日本語以外の言語を交えて話しているという状況にあることがわかる。

**主観的健康(Q10\_10)**

出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
よい	15	42.86	15	44.12	44.12
まあよい	8	22.86	8	23.53	67.65
ふつう	8	22.86	8	23.53	91.18
あまりよくない	2	5.71	2	5.88	97.06
よくない	1	2.86	1	2.94	100.00
欠損値	1	2.86			
合計	35	100	34	100	

本人の健康状態について尋ねたところ、67.7%が「よい」「まあよい」と回答していた。この設問に「あまりよくない」「よくない」と回答する状態で学習支援室に来室する児童・生徒は少ないと考えられることから、当然の結果と考えられる。

**(2) 教室最終日の調査結果**

**【問1：主観的健康】**

主観的健康については、「よい」という回答が減少し、「まあよい」が増加した。「よい」と「まあよい」の合計は76.0%で初日調査より約8ポイント増加した。

**後：主観的健康(Q1AF)**

出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
よい	8	22.86	8	32.00	32.00
まあよい	11	31.43	11	44.00	76.00
ふつう	5	14.29	5	20.00	96.00
あまりよくない	1	2.86	1	4.00	100.00
欠損値	10	28.57			
合計	35	100	25	100	

**【問2：学習に対する意識】**

「寝る時間を減らしてまでよい成績をとらなくてもよい」という意見に対して肯定的な回答の比率は40.0%と初日調査からほぼ変わらないが、「勉強が嫌だなと感じる」は54.6%から72.0%へと17.4ポイントも増加した。学校の授業は座っていればやり過ごすことができるものの、学習支援教室の少人数授業ではそうはいかない。そのことも影響しているものと推測される。

**後：寝る時間を減らしてまでよい成績をとらなくてもよい(Q2\_1AF)**

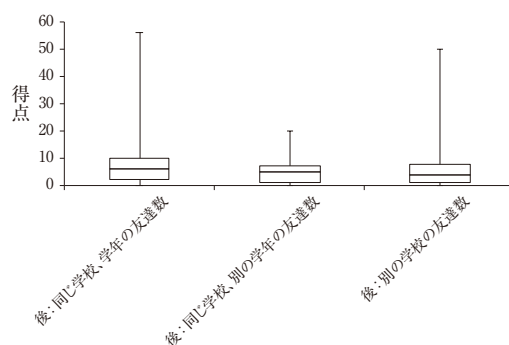
出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
そう思う	2	5.71	2	8.00	8.00
まあそう思う	8	22.86	8	32.00	40.00
あまりそう思わない	9	25.71	9	36.00	76.00
そう思わない	6	17.14	6	24.00	100.00
欠損値	10	28.57			
合計	35	100	25	100	

**後：勉強が嫌だなと感じる(Q2\_2AF)**

出現値	度数	確率 (%)	有効度数	有効確率	累積確率
そう思う	4	11.43	4	16.00	16.00
まあそう思う	14	40.00	14	56.00	72.00
あまりそう思わない	5	14.29	5	20.00	92.00
そう思わない	2	5.71	2	8.00	100.00
欠損値	10	28.57			
合計	35	100	25	100	

**【問3：友人数】**

友人数については、中央値が「同じ学校学年の友人数」が6人、「同じ学校別の学年の友人数」が5人、「別の学校の友人数」が4人で、初日調

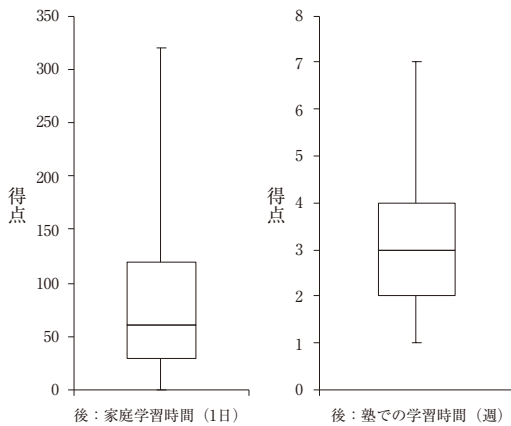




査とほとんど変化がなかった。学習支援室に通うことによって、新たな友人が増えることを期待していたが、数字に表れるほどではなかった。

**【問4：家庭学習時間】**

家庭での学習時間は、初日調査とほぼ同じ結果であり、中央値は60分、回答者の50%は30分から120分と回答していた。塾に通っていると答えた児童・生徒は5名であり、週合計の学習時間は中央値が3時間、回答者の50%は2時間から4時間と回答していた。昼間のほとんどの時間を学習支援室に費やしていたのだから、塾での学習時間が減少するのは当然のことだろう。



**【問5：進学意向】**

大学まで進学を希望する回答者は56.0%であり、初日調査とほぼ同じであった。

**後：進学希望 (Q5AF)**

出現値	度数	確率 (%)	有効 度数	有効 確率	累積 確率
高校まで	2	5.71	2	8.00	8.00
専門学校まで	2	5.71	2	8.00	16.00
高専・短大まで	1	2.86	1	4.00	20.00
大学まで	14	40.00	14	56.00	76.00
大学院まで	5	14.29	5	20.00	96.00
まだわからない	1	2.86	1	4.00	100.00
欠損値	10	28.57			
合計	35	100	25	100	

**【問6：将来に対する意見】**

「大学を出ないとよい仕事に就けない」という意見を肯定するものは79.2%と、初日の結果と比較すると約6ポイント増加している。「がんばって働かなくても暮らしていける」と楽観的に考えているものは8.0%と少数派であり、「希望する学校や会社に入れないかもしれない。不安だ」と回答したものは64.0%と初日の結果と同程度であり、将来に対して不安を感じている児童・生徒が初日と同様に少なくないことがわかる。

**後：大学を出ないとよい仕事につけない (Q6\_1AF)**

出現値	度数	確率 (%)	有効 度数	有効 確率	累積 確率
そう思う	10	28.57	10	41.67	41.67
まあそう思う	9	25.71	9	37.50	79.17
あまりそう思わない	5	14.29	5	20.83	100.00
欠損値	11	31.43			
合計	35	100	24	100	

**後：頑張って働かなくても普通に暮らせる (Q6\_2AF)**

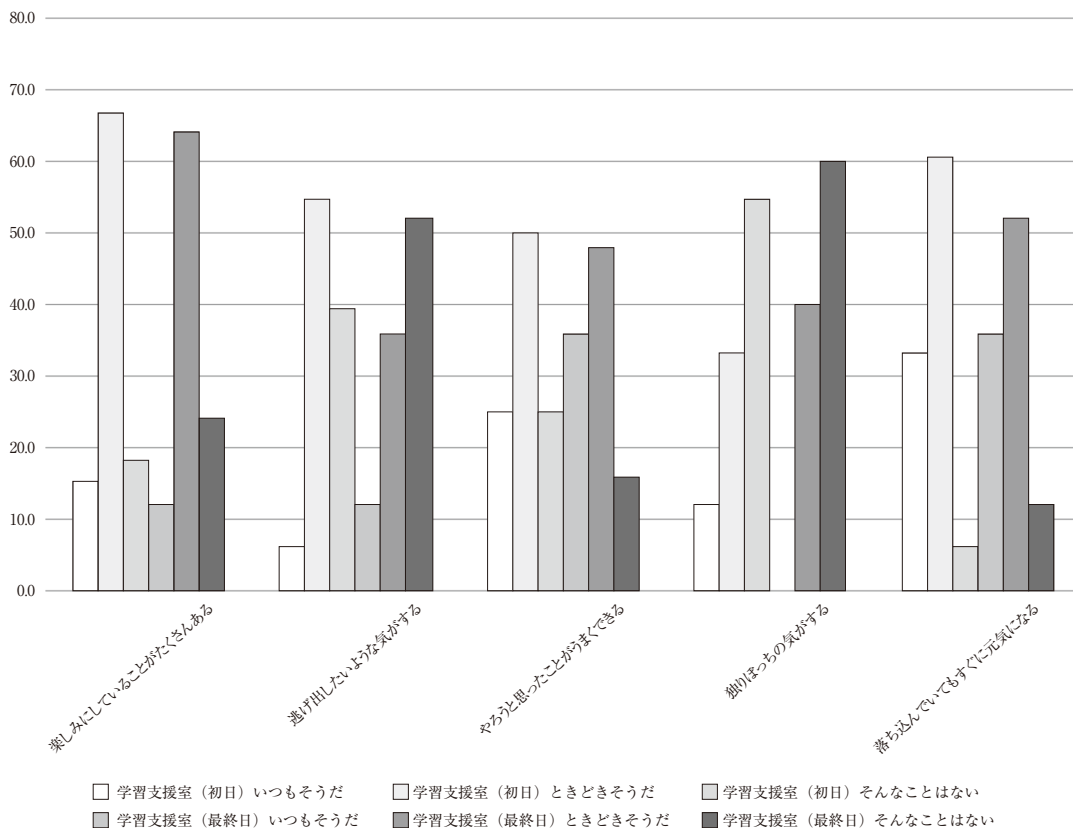
出現値	度数	確率 (%)	有効 度数	有効 確率	累積 確率
そう思う	1	2.86	1	4.00	4.00
まあそう思う	1	2.86	1	4.00	8.00
あまりそう思わない	12	34.29	12	48.00	56.00
そう思わない	11	31.43	11	44.00	100.00
欠損値	10	28.57			
合計	35	100	25	100	

**後：希望する学校や会社に入れないかも、不安 (Q6\_3AF)**

出現値	度数	確率 (%)	有効 度数	有効 確率	累積 確率
そう思う	3	8.57	3	12.00	12.00
まあそう思う	13	37.14	13	52.00	64.00
あまりそう思わない	5	14.29	5	20.00	84.00
そう思わない	4	11.43	4	16.00	100.00
欠損値	10	28.57			
合計	35	100	25	100	

**【問7：心理的健康状態】**

児童版抑うつ指標 (DSRS-C) 9項目のうち5項目についても、初日と最終日の両方の調査で尋ねた。6本の棒グラフのうち左側3本が初



日調査の結果を、右側 6 本が最終日調査の結果を示している。

「楽しみにしていることがたくさんある」については、初日と最終日で大きな差はみられなかった。「逃げ出したいような気がする」については、「ときどきそうだ」と回答した子どもの割合が、初日が54.6%であったのに対して、最終日は36.0%と19ポイント減少した。「やろうと思ったことがうまくできる」については、「いつもそうだ」と回答した子どもの割合が、初日が25.0%、最終日が36.0%と11ポイント高い値を示していた。「独りぼっちの気がする」については、「いつもそうだ」と回答した子どもの割合が初日は12.1%であったのに対して、最終日には0%であった。「落ち込んでいてもすぐに元気になる」と回答した子どもの割合は初日と

最終日では大きな差はみられなかった。

このように、5項目中3項目からは、抑うつ傾向が減少したことが示された。

#### 【問8：勉強で頑張りたいこと(自由記述)】

「勉強で頑張りたいこと」を自由記述にて尋ねた。初日の回答と同様に、無回答を除く全ての記述(21ケース)を対象としてアフターコーディングを試みた。付与したコードは、初日の回答と同様に「教科」と「目標」である。コードについて集計した結果、「教科」は11ケース、「目標」は12ケースであった。自らの学習について目標設定がみられる記述が、回答者の半数を占めるようになった。「つうやくしゃになりたいので英語や日本語などの言語をもっと勉強したい」「毎日コツコツやるようにしたい」「将

来自分の道が多くなるように、たくさん勉強したい」といった自分なりの目標設定が垣間見られる記述が増加した。

**【問9：学習支援教室で楽しかったこと(自由記述)】**

「学習支援教室で楽しかったこと」を自由記述によって尋ねた。無回答を除く全ての記述(25ケース)を対象としてアフターコーディングを試みた。付与したコードは、「教育機能」「大学生との触れ合い」「ネットワーキング機能」「その他の楽しみ」の4種類であった。「教育機能」として分類された記述は、「先生たちとしゃべることができて、自分の意見をいいやすくなった」「先生たちから色々な学習方法とかを聞いてよかった」「勉強する意味がわかり、少し勉強が好きになったことが嬉しかった」などである。「大学生との触れ合い」として分類された記述は、「大学生と色々なお話をしてもっと大学のことを知れた」である。「ネットワーキング機能」として分類された記述は、「友達とおしゃべりしたり、あそんだりして楽しかった」「自分と同じ宗教の人とかとお話ししたりすること」「学校では会えない友達にあえること」などである。「その他の楽しみ」として分類された記述は、「ワークなどの終わりが見えた時など」「すべて楽しかったです」などである。

コードを集計した結果、教育機能：13ケース、大学生との触れ合い：2ケース、ネットワーキング機能：11ケース、その他の楽しみ：5ケースであり、学習支援室が持つ教育機能を評価する記述が多く、それとほぼ同程度、ネットワーキング機能を評価する記述も多かった。

**【問10：学習支援教室でいやだったこと(自由記述)】**

これについては、「特になし」という記述が大半であった。ただし、2名からは「駅からちょっと遠すぎた」「家からの距離が遠く、行

きにくい」「お金がかかる」という意見も寄せられた。

**【問11：進学意向および将来の仕事に対する考えが変わったか(自由記述)】**

無回答を除く全ての記述(24ケース)を対象としてアフターコーディングを試みた。付与したコードは、「深化した」「継続」「変化なし」であった。「とにかく今はやるべきことを頑張り、たくさん悩んで進路を決めることがいいと分かりました」「大学で勉強しているので、大学ってこんな感じなんだ、て分かりました」「考えが変わったというより、自分が何をしたいのかが明確になった」といった記述は「深化した」とコードした。「変わらなかった」「とくにない」「わからない」という記述は「変化なし」としてコードした。「私の考えや意志は変わることはありません」「変わってません！ずっとつうやくしゃになりたいと思いました！」などの記述は「継続」とコードした。

コードを集計した結果、深化した：10ケース、継続：4ケース、変化なし：10ケースであった。進学意向や将来の仕事に対する考えが深まった、あるいは維持できているというケースが14ケースと半数以上を占めていたものの、変化なし・わからないというケースも10ケースと少なくなかった。

**4 考察**

これまでの分析結果から得られた知見を以下にまとめておきたい。

- ① 本教室に参加した子どもたちの多くは、学校文化に対して自己評価としては、従順であり、馴染もうとしていると評価している。しかしながら実態としては馴染むことは難しく、そのことが心理的健康状態を悪くしている可能性が示された。

- ② 「大学を出ないとよい仕事に就けない」という意見を肯定するものが7割程度存在するものの、大学までの進学を希望しているものは6割弱である。大学進学すべきとは考えるものの、それが進学希望に直接結びついていくわけではないことが示唆される。また、将来に対して不安を感じているものは7割弱存在していた。難民小中学生の学習を支援し、人生を切り拓く知力・能力を磨くための支援の必要性が示された。
- ③ 学習支援室に通うことによって、友人数が値として増加したわけではない。しかしながら、「自分と同じ宗教の人とかとお話ししたりすること」「学校では会えない友達にあえること」を、学習支援教室で楽しかったこととして挙げた子どもが多かったことから、学習支援室がもつネットワーキング機能も重要であることが示された。
- ④ 抑うつ傾向について、初日調査と最終日調査を比較した結果、抑うつ傾向が減少した。このことから、学習支援室が子どもたちにとって、ひとつの居場所となり心理的健康状態を良好に保つ機能を果たしていることが示唆された。
- ⑤ 勉強で頑張りたいことを自由記述によって尋ねたところ、初日調査と比べて最終日調査では、自分なりの目標設定が垣間見られる記述が増加していた。このことから、学習支援教室に参加することによって、学習の目標設定ができるようになった児童・生徒が増加したことが示された。

本研究の目的は、財団・NPO・大学の三位一体で取り組んだ集中学習支援教室が、難民小・中・高生の学力および学習意欲向上に対してどの程度の寄与を成し得たかを測定することであった。調査の結果、学習支援教室に参加す

ることによって、自らの学習目標の設定ができるようになった児童・生徒が増加したという教育効果があったことがわかった。また、学校文化に馴染みたいと望むものの、実態としては馴染めず困難を抱える児童・生徒が少なくない現状において、学習支援教室が貴重なネットワーキング機能を提供できることも示された。

集中学習支援教室は、期間限定の教室である。したがって、その教育機能とネットワーキング機能には、持続性がない。自らの学習目標の設定ができるようになった児童・生徒の目標を叶える仕組みを、そして学習支援教室でできたつながりを後の生活においても維持できる仕組みを、どのように構築していくか。これらの点は、今後の課題としたい。

#### 【参考文献】

- 浅川達人、2018、「財団・社会福祉法人・大学の三位一体で運営する集中学習支援教室」、吉成勝男・水上徹男編『移民政策と多文化コミュニティへの道のり：APFSの外国人住民支援活動の軌跡』、現代人文社、pp.105-115
- 家計経済研究所編、2009、『現代核家族のすがた—首都圏の夫婦・親子・家計』家計経済研究所
- 明治学院大学教養教育センター・社会学部編、2016、『もうひとつのグローバリゼーション—「内なる国際化」に対応した人材の育成』、かんよう出版
- 明治学院大学教養教育センター・社会学部編、2017、『外国につながる子どもたちと教育—「内なる国際化」に対応した人材の育成』、かんよう出版
- 明治学院大学教養教育センター・社会学部編、2018、『多文化共生を学び合う 配慮と偏見のはざま—「内なる国際化」に対応した人材の育成』、かんよう出版
- 明治学院大学教養教育センター・社会学部編、2019、『多様な人の学びの保障—「内なる国際化」に対応した人材の育成』、かんよう出版
- 野沢慎司、2017、「難民の子どもたちのための夏休み学習支援教室—大学キャンパス内で学生が支援に関わる試み」、明治学院大学教養教育セ

## 夏季集中学習支援教室の効果測定

ンター・社会学部編、2017、『外国につながる子どもたちと教育—「内なる国際化」に対応した人材の育成』、かんよう出版、pp.31-50

### 【注】

- (1) 法務省WEBサイトより。[http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00076.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00076.html) (2019.9.16閲覧)
- (2) 活動の詳細については、プロジェクトが刊行した4点のブックレットおよび浅川(2018)を参照されたい。
- (3) この間の経緯については、野沢(2017: 31-50)に詳細にまとめられている。
- (4) 第1回は2016年8月、第2回は2017年3月、第3回は2017年7～8月、第4回は2019年3月、そして第5回は2019年8月に開催した。
- (5) 児童・生徒によっては、教室の初日から参加しなかったものも存在する。そこで、当該児童・生徒が教室に参加した初日を、ここでは「初日」とすることとした。同様に、事情によって教室の最終日まで参加できなかった児童・生徒に対しては、当該児童・生徒の最終日を「最終日」とした。
- (6) 日本語の読み書きができない児童生徒もいたため、英語、フランス語、ビルマ語、ベトナム語に翻訳した調査票も用意した。
- (7) ただし、今回は最終日調査の回答者が25名と少なく、また小学生から高校生までを含んでいるため、対応サンプルの検定は行わなかった。
- (8) 調査対象者は、首都30km圏内(自治体の役所が東京駅から半径30km圏内か否かで判明)に在住する、妻の年齢が35～49歳の核家族世帯における、妻とその夫、および小学4年生～高校3年生までに該当する範囲内の長子1人であった。
- (9) 「そう思う」と「まあそう思う」の合計。以下の集計においても同様にまとめている。
- (10) コーディングとカウントにはMAXQDAを用いた。